パネリスト　塩瀬　隆之氏
中田　豊一氏
濱川　知宏氏

コーディネーター　阿部　健一氏

リモート参加も交えながら、パネルディスカッションが行われた

パネルディスカッション

変化のスピードに流されない価値観を

阿部　会場から質問をいただいています。今回のテーマは変容なのですが、社会が加速度的に変化しているなかで、流されないようにするためには、どうしたらよいのか。

濱川　少し前に、現代人が1日に受け取る情報量は江戸時代の1年分だということを読みました。もちろん、江戸時代に比べて人間として、動物として、そんなに進化はしていないわけで、ただただ環境が変わっているということなので、そこのギャップは、すごく感じています。スピードに対応していくことは非常に大切なのですけれども、ノイズをカットオフする必要性は、すごく感じていて、そうしないと、情報や社会のスピードに流されてしまうことが起きてくるのではないかと思っています。

塩瀬　情報の量というのは、すごく重要な視点だと思います。そして、本当はデータ量が増えているだけなのです。情報というのは自分にとって価値のある、次の行動に資するようなものなのに、そうじゃないものも情報だと思い込んでいるから、メディアに出ている文字数を全部、受け取らなければならないような強迫観念に至るだけです。江戸時代、今の時代で僕らの読解力って、そんなに上がっていないんですね。情報処理能力も。自分にとって本当は情報でも何でもないはずのデータに左右されないという、価値観の変革が必要ではないかなと思います。

中田　都会の生活が忙しくて、気ぜわしさというのは、生活のリズムや心の持ち方で緩和できるのだろうかということが、今、私にとって大きな関心です。結論が出つつあって、都会にいる限り、難しいなぁ、と。都会の生活は激しい変化への対応を私に迫ってくるような気がして、それが結論になりつつあります。ただ、若い人は若い人なりに（激しい変化へ）正面から立ち向かったり、上手に逆手に取ったり、それぞれあっていいわけです。（変化から逃れることが）必要だと思ったら、そういう環境を選べる、自由な社会を作っていけばいいと強く願っています。

阿部　ＳＤＧｓについて、どんなことを考えているのか。

濱川　日本ではＳＤＧｓが加熱しているなかで、本質的なものと、ＰＲ的にやっているものとが分かれていると思うのです。企業が本格的に社会貢献や環境問題に取り組むことは今までにない流れなので、全体的には日本にとって、いい流れなのかな、と思っています。でも、一つ思うところは、２０３０年にゴールを置くのではなくて、２０５０年や２１００年に、どういう企業になっていく、どういう社会にしていきたいのかというところを考えていく必要があるかなと思います。

ＳＤＧｓの取り組みは日本社会の変化

会場とオンラインで熱心に意見が交換された

塩瀬　正直に言うと、僕が講演するときには、ＳＤＧｓごっこは止めましょうということを話すようにしています。それぞれの国で起こっている、ただの暮らしの話ですよね。なぜか特別視しすぎの気がするし、貧困だから、かわいそうという前提で入っているのが僕は教育上、よろしくないと思っています。大人が勝手に作ったルールのなかに閉じ込めているだけのような気もしています。ＳＤＧｓの社会課題を子供たちの勉強に使うのが嫌で、課題を作ったのは大人だから、大人が解決した方がいいのではないかと思うのです。子供たちは、もっと明るい未来を作れる、そのお手伝いを大人がしていくべきではなかろうかと思っているのです。

中田　何年かおきに国際機関や国連が新しいテーマを立てて、国際社会へ歩みかけることを延々と繰り返してくるのを見たので、今回もまた、それの続きかと思っていたんです。日本で受け入れられないと思ったのですけれども、予想外に人々が関心を持って、特に企業からＳＤＧｓに自分たちも取り組んでいます、取り組みたいという声が上がっています。私は日本の社会も変化していると感じています。

大きく分析してみると、今の日本社会で生きている多くの人たちが、現状にはそれなりに満足していて、このまま悪くならなければいいよなくらいに思っている半面、この社会の変化がどんどん続いていいんだろうかという一抹の不安も感じています。一つの対案みたいなものをＳＤＧｓ的なものが示してくれているのではないかと一部で捉えられて、それがＳＤＧｓに対する大きなリアクションとなって日本社会に表れているんじゃないかなという気がして、いいことなんじゃないかなという風に締めくくりたいと思います。

阿部　３人の方のいろいろな話のなかで、自分自身が行動を変えていくヒントをたくさん得られたと思います。どうもありがとうございました。

Ｅａｒｔｈ Ｃｏｍｐａｎｙ
共同代表
濱川 知宏氏
（リモート参加）

基調講演③　人と社会と環境を豊かにするモデルの探求 ～Ｅａｒｔｈ Ｃｏｍｐａｎｙの試み～

エコホテルで次世代につなぐ未来

きょう私は（インドネシアの）バリ島ウブドというところにいまして、エコホテルからプレゼンをさせていただきます。われわれの事業を簡単に説明させていただきたいと思います。

まずはインパクトヒーロー支援事業から。中間支援をする立場で、最前線で活躍、活動するチェンジメーカーを支援することです。少し変わっているところは、1年に1人を選んで、その人を3年間、集中的に支援することです。そこがユニークなやり方なのかなと思っています。どのようなことをするかということですが、一つはファンドレイジング。われわれが資金調達して最低限の手数料だけ頂いてお金を渡す、それを活動費やプロジェクトの予算に使ってもらう形を取って、1人当たり1千万円から3千万円の資金調達をしています。今まで1億3千万円くらいの資金調達をして、その多くをチェンジメーカーへ届けています。

次はインパクトアカデミーと呼んでいる教育、研修事業です。この事業で重要視していることは2つあります。今、バリ島でどういう環境課題、社会課題が起きているのかということを五感を使って感じてもらうというところと、そういう課題に対して命を懸けて取り組んでいるチェンジメーカーの社会変革の本場を見てもらうということです。今まで40本近くのプログラムを開催して、23カ国から535人に参加してもらっています。

3つ目の事業は、インパクトコンサルティングというアドバイザリー事業です。従来の非営利団体は社会的に、環境的にいいことをしているのですけれども、収益性や永続性に欠けている。それのビジネス化というプロセスをお手伝いします。一方、収益性がある営利企業にも、社会や環境にいいことに取り組む余地はまだまだあります。そんな企業のサポートをしています。

最後の事業の説明にまいりたいと思います。私が今、いるホテルのお話です。このエコホテルは、われわれの価値観やビジョンを具現化した、形にしたものです。エコホテルを使って、次世代につなぐ未来の一例を作っていきたいなと思っています。すなわち、経済が回れば回るほど地球上の人や社会、環境が良くなる循環型の仕組み「ウィンウィンウィンウィン」の関係性を作ったビジネスモデルを開発して、軌道に乗せようとしているところです。

りそなアジア・オセアニア財団
YouTubeチャンネルにて2021年
1月11日（月・祝）までシンポジウムをアーカイブ配信中

主催　公益財団法人 りそなアジア・オセアニア財団
共催　大阪府、大阪市、大阪商工会議所、関西経済連合会、大阪産業局
後援　ジェトロ大阪本部、ＪＩＣＡ関西、関西ＳＤＧｓプラットフォーム、りそな銀行、関西みらいフィナンシャルグループ、りそな総合研究所、産経新聞大阪本社

＜企画・制作＞産経新聞社メディア営業局